

優秀賞

私の夢

(関東) 千代田運輸(株) 中山 登

今から50年以上前、私は四国の片田舎に住む幼稚園児でした。小学校と同じ敷地にある幼稚園への登園は、町へ自転車通勤する叔母の後部座席に同乗させてもらっていましたが、帰りは歩きでした。その道のりは四キロ強もあり、山間部のため、そのほとんどが上り坂でした。五歳の幼稚園児にとって、この道のりは遠くしかも未舗装の道路ということもあり、厳しいものでした。

当時のことですから、交通量はそれ程多くはありませんでしたが、山から切り出した碎石を運ぶ大型ダンプカーが行き交っていました。そんな道を幼馴染の友達といつも二人で通っていましたが、今思うと、一度も事故に遭わなかったことは奇跡に近いと思います。

通行車両の九割強がダンプカーで、帰宅途中にダンプカーが来る度に友達と二人で山の斜面や道端の田んぼに避難していました。ダンプカーが勢いよく走り抜ける度に砂ぼこりが舞い上がり、しばらくは目を開けられない程で、口の中はいつもジャリジャリしていました。特に夏場は砂ぼこりで頭が真っ白になり、顔からは泥の汗を流していました。また、雨の日は、跳ね上がる泥を傘で防ぎきれず家にたどり着いたときには、びしょ濡れの泥んこという劣悪な環境でした。そんな訳で当時の私はダンプカーが大嫌いになり、友達と二人の間ではダンプカーのことを「敵」と呼んでいました。

そんな夏のある日、いつものように砂まみれで歩いていた私達の横に一台の

「敵」がゆっくりと止まったのです。そして一人のおじさんが「敵」の中から降りてきました。私達は「敵が来た！」と思って緊張しました。するとおじさんが「汚いなあ！」と言いながら私達の頭と服の砂ぼこりを手で払い、「乗れ！」と言って一人ずつ抱え上げ、ダンプカーの助手席に乗せたのです。友達は恐怖のあまり泣き出しました。私も「敵の陣地に連れて行かれる」と、恐怖で動けなかったことを鮮明に覚えています。実際は、私達の家近くまで送ってくれたのですが…。そのおじさんには週に一、二度位しか会いませんでしたが、会った時には必ず送ってくれました。

私達は遠くからでも、ダンプカーの色と形でおじさんのダンプカーを識別できるようになっていました。休みの日や、自宅付近で遊んでいるときに、おじさんのダンプカーを見つけると「頑張れー！」と

両手を挙げ、飛び跳ねながら、体全体でエールを送っていました。おじさんも笑顔で手を振ったり、短かくクラクションを鳴らして応えてくれました。「大人と友達になれた」ような気になり、子供心にとでもうれしかったことを覚えています。

そして、私が自転車通学をするようになってからも、おじさんは他のダンプカーと違い、私を追い抜くときや、すれ違うときにはその少し前からスピードを緩め、できるだけ砂ぼこりや泥跳ねをしないよう配慮した運転をしてくれたのです。そんなおじさんは私にとってヒーローでした。

当時の私の夢は、「ダンプカーの運転手になって、子供を乗せてあげたり、自転車に乗っている人にやさしい運転をしたい」と、真剣に思っていました。小学三年生の時、「ぼくの夢」と題した作文にも書いた事を覚えています。

そんな私も、中学生、高校生となり、夢も少しずつ変化していき、実際には全く違う道に進みました。

定年退職後、縁あって現在の運輸会社に再就職し、安全に係わる仕事をさせていただいております。乗務員さんと接する時や、事故が発生した時には、あのおじさんの運転を思い出します。皆があのおじさんのような「思いやりのある運転」をすれば、事故は確実に減少するはずだ、と…。車を安全に運転するには、技術や経験も必要ですが、最も重要なことは「思いやりのある運転」ができるかどうかだと思います。

「思いやりのある運転」をするためには、周囲に目配り、気配りができなければなりません。それができる人は危険も予知できるはずですし、危険な行動もとらないと思います。

管理者が行う乗務員教育は、プロとしての技術も必要ですが、「思いやりのある運転」をすることのできる「心の醸成」が必須ではないだろうかと考えます。

では、どうすれば「心の醸成」ができるのか。個々の性格や今まで生きてきた歴史等々を熟慮し、「管理者対乗務員」として接するのではなく、最終的には「人対人」だと思います。まず管理者たる「人」の人間性が重要だと考えます。管理者の人間性が乗務員である「人」に影響を与えると思うからです。

私自身を含め、「心の醸成」について見つめ直し、事故のない明るい職場づくりのために真の「縁の下の力持ち」になることが、今の私の夢です。